

仏の願い

平成30年 西雲寺だより 冬号（57号）



当山

御正忌報恩講の

ご案内

11月28日(水)～30日(金)

28日お逮夜(2時)

お初夜(7時) (武周お講)

29日お日中(10時)

大逮夜(2時) (御伝鈔)

お初夜(7時) (御伝鈔)

30日満日中(10時)

法話 福井 奥田順誓師

(29日より)

お誘い合わせの上

ご参詣下さいますよう

ご案内いたします

親鸞聖人のご生涯とその教え

愚禿の自覚

比叡の山を下りる

親鸞聖人は九歳から二十年間比叡の山で戒律をたもち厳しい修行をされましたが、二十九歳の時、山を下りる決心をされます。自力聖道の修行ではいかんとも煩惱を断ずることはできず、救いを見出すことはできなかつたのです。聖人は当時の心境を次のように述べておられます。

定水（じょうすい）を凝（こら）すといえども
識浪（しきろう）しきりに動き

心月（しんげつ）を観ずといえども
妄雲（もううん）なお覆う

比叡山の山頂から、穏やかに琵琶湖の水面を眺めるにつけ、自分の乱れる心を嘆いておられるのです。

六角堂参籠

親鸞聖人は山を下りられるにあたり、どのような道を歩むべきかいろいろ迷われたことと思われまふ。僧としての身分を捨てることも考えられたと思います。しかし親鸞聖人は僧として、洛中にある六角堂に百日間参籠することを決意されます。六角堂は聖徳太子が建立されたもので、救世観音菩薩がまつられています。当時聖徳太子は

救世観音菩薩の化身としてあがめられておりました。親鸞聖人が自分の歩むべき道を聖徳太子に尋ねられたのは今回が二回目、一回目は聖人十九歳のとき三骨一廟（聖徳太子・お妃・お母さん）といわれる、聖徳太子のお骨が納められた磯長（しなが）の御廟に三日間参籠され、「汝の命根（みょうこん）十余歳なり」の夢告を受けられております。聖人の奥方である恵信尼公が、聖人亡きあと、末娘の覚信尼に送った手紙に

山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて後世を祈らせ給いけるに：

とあり、六角堂に籠つたのは、「後世を祈るため」と書かれています。この言葉には何か切羽詰まった、重いものが感じられます。『歎異抄』のなかに

いづれの行もおよびがたき身なれば
とも地獄は一定（いちじょう）すみかぞかし

とありますが、救われる道が見出せない絶望感のなかに、せめて命の尽きたあとに救われる道を必死に祈っておられるお姿が偲ばれます。参籠も百日目に近づいてきた九十五日目の明け方親鸞聖人は、救世観音菩薩の夢告を受けられました。『御伝鈔』には次のように書かれています。

救世観音は、端正なおごそかなお顔をなさり、白い袈裟をつけられて白い蓮の花の上いきちんとお座りになって、こう告げられました。

「もし修行者のあなたが、過去世の業報によつて女性を求めらるなら、私はあなたの妻となつて添いとげ、あなたを浄土に導いてあげましょう。これは私の誓願であり、このことを煩惱に苦しむ一切の人々に説き開かせなさい」と、そこでさつそく集まれる群集に説き開かせようとしたとき、夢からさめた。

親鸞聖人は夢から醒めて、夢告の意味するところを深く思索されたものと思われまふ。夢告は戒律をまもり、厳しい修行によつて煩惱を断じて救われていく仏道でなく、煩惱をもつたまま、煩惱具足の身でたすかつていく仏道があることを指し示すものでした。それは知恩院の近くの吉水の草庵で法然上人が説いておられた専修念仏のみ教えを暗示しているものでした。親鸞聖人は比叡山において、吉水で専修念仏のみ教えを説いておられる法然上人の名声は十分知つておられました。何故か法然上人のものとを訪ねることをためらつておられたのです。それは比叡山において二十年間励まされた自力修行の執着があつたからではないでしょうか。しかし今回の夢告は躊躇せず法然上人のもとへ訪ねて行けという聖徳太子のお諭しであつたのです。親鸞聖人は早速法然上人を訪ねていく決心をされます。

吉水の法然上人の草庵へ

吉水の草庵には早朝にもかかわらず、たくさんの老若男女が、法然上人の説法に耳を傾け、お念仏の声に満ちていました。お念仏の尊さを語る法然上人の柔和なお顔、

そして口もとからもれるお念仏の声、その尊いお姿に接して、親鸞聖人の今までのわだかまりがときほぐされていったものと思われまます。法然上人の説かれるお念仏の教えは、念仏以外のすべての行を棄てて、ただお念仏一つを称えれば、浄土に往生することができるといふものでした。何故なれば称念念仏は仏の本願が我々迷いの衆生を救うために選び取った行であるからなのです。南無阿弥陀仏の名号には如来の願いがこめられているのです。「どうかわが名を称えて浄土を願ってくれ」と我われ凡夫に呼びかけているのです。その願いのままにただ念仏申させていただくのが、法然上人の説かれる専修念仏の教えだったので。しかし親鸞聖人は法然上人の説かれる他力のお念仏のところが本當に領けるには時間を要したのです。親鸞聖人の奥方である恵信尼公が聖人の亡くなられた後、末娘にあてた手紙のなかで「百か日、ふるにもてるにもいかなるだいな事にもまいりてありし」とあり、百日間吉水の法然上人のもとへ通われたとあります。そして時には納得のいくまで問答を繰り返したこともあったと思われまます。ある日の法然上人の説法は次のようなものでした。

弟子「法然さま、念仏称えている時、睡魔におかされて、念仏を称えることを怠つてしまうのですが、どのようにしたらよろしいでしょうか」

法然「目が醒めたら、念仏を申しなさい」
弟子「女性を思う心が起つて、念仏がおろそかになつてしまうのですが、どのよ

うに心得たらよろしいでしょうか」
法然「もし妻をめぐつたほうが念仏を申しやすいのであれば、妻をめぐり、念仏申しなさい」

弟子「戒律をまもることができないのですかどうしたらよいのでしょうか」

法然「末法の世の中には、持戒はないのだから破戒もありません。ただあるのは名ばかりの僧です。阿弥陀仏の本願は、そうした凡夫のために起されました。ただお念仏申すことが肝要です。」

親鸞聖人はお念仏してたすかかっていくことがどういふことか、牛が餌を反芻（はんすう）するように、法然上人の説法をくり返しくり返し領くことができるまで開かれたものと思われまます。そして百日間の聴聞をえて、自力を棄て本願他力に帰すという回心が実現したので。ご自身に実現した回心を次のように述べておられます。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり（歎異抄）

愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す（教行信証）

雑行（ぞうぎょう）とは、自力の計らい、分別で念仏を称えることです。廃悪修善（悪を憎み善を積むところ）で念仏を称えたり、罪福信（罪や災いを恐れて幸せを求めるところ）で唱える念仏は雑行です。「我名を称

えてくれ」という如来の大悲のおこころから遠く離れるのです。

雑行を棄てて本願に帰す

時機純熟（じきじゆんじゆく）ということばがあります。私たちが仏法に出遇うためには、時と機（仏法をいただく者）が縁が熟して一つにならなければなりません。私たちが仏法を聞いても、身に響かないのは、仏法が聞えてくる時とそれを受け取る私とが、縁が熟して一つにならないと、ころにありません。ご縁が熟さなければ仏法はなかなか響いてこないのです。親鸞聖人においては、比叡山における二十年間の自力の修行、山を下りて六角堂の百日間の参籠、そして法然上人との出逢いと百日間の聴聞、それらのことが宿縁となつて今、如来の本願の呼び声が聞えてきたのです。本願に出遇われたのです。久遠の古よりはたらき呼びかけていた如来の本願に出遇い、そして久遠劫より流転し迷つてきた罪悪深重の凡夫に目覚めたのです。親鸞聖人が如来の本願に出遇った深いよろこびを述べたおことばを記しておきます。

弥陀の五劫恩惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さらばそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ（歎異抄）

ほんこさんがつとまりました

10月17～19日



お掃除や仏具のおみがきに沢山の方が来てくださいました！



幕張り 提灯台の設置 庭や床のそうじなど 事前の準備がなければ報恩講はつとまりません



お手伝いをいただいた皆さん、ありがとうございました！



ご法話 加賀 日下賢城師



仏教聖歌コーラス

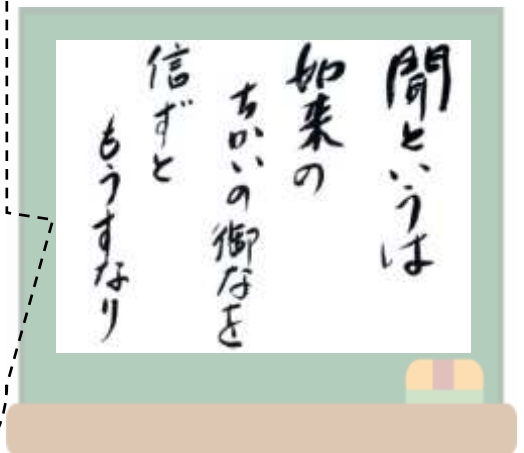
遠近よりお参りいただき、皆で一緒に人生のよりどころを聞かせていただきました。感謝です。



孫娘の長女、愛可あいか（法名・釈しやく愛樂あいぎょう）が、今年三月に得度し、報恩講に出勤させて頂いていただき、ありがとうございました。今後、法務を手伝うべく勉強中です。なにとぞお育てくださいますよう、よろしくお願いいたします。

私たちにとって「南無阿弥陀仏」と称名念仏することが如来さまのおこころにかなうことですが、それは「南無阿弥陀仏」のみ名のなかに如来さまの誓いが表現されているからです。その誓いを聞かせていただくのです。「一切の迷いの衆生よ、我が名を称えて、我が国に生まれんと願ってくれ」という如来さまの誓いが「南無阿弥陀仏」となって私たちにはたらいているのです。仏法は響きを聞くことだといわれます。お説教でも理屈を聞くのではなく響きを聞かせていただくのです。「南無阿弥陀仏」と称えることは、永遠真実なる如来さまが、我がはからいを超えて、呼び声となつてはたらいて下さっている、その響きを聞かせていただくのです。そして聞こえたまま領かせていただくのです。それを信心というのです。

山門掲示板



報恩講

法の御寺の佛前に
頭たれにし
なにを甘ゆる
あら不思議
知らず知らずに
合わす手も
心起きるも
如来の大悲

西列所町 釈真光妙映

御正忌報恩講をつとめる

親鸞聖人は、弘長二年十一月二十八日御往生されました。『御伝鈔』に「類齢九旬に満ちたまう」とあり、お年をめされて九十歳になっておられたとあります。当時としては稀な長寿であったと思われまます。その九十年といういのちとなったのは、真実をもとめてやまない求道心であったのではないのでしょうか。

ご苦勞の多いご一生でありましたが、最も心痛められたのは、晩年関東の教団で起った異義であり、そのため我が子善鸞さまを義絶されなければならなかったことでしょう。聖人が何とか異義をおさめようと、お弟子やお同行に送ったお手紙にはお弟子やお同行を信じてやまない大悲のお心とともに、如来に背いていく者に対しての深い悲しみに満ちています。しかし、聖人は八十五歳の二月九日、夢告を受けられ立ち上がられました。そして「正像末和讃」やその他著述に励まれ、ご一生のうちで最も充実した晩年を過ごされたのです。またお弟子の唯円によって『歎異抄』が著され、その異義を歎異する唯円の純粋なところは、読む者の心をうってやみません。

弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
撰取不捨の利益にて
無上覚をばさとるなり(夢告和讃)

☆ 除夜の鐘・初詣 参拝のお誘い ☆

11月28日～30日 御正忌報恩講

12月31日PM11:50～ 除夜の鐘

1月1日、2日、3日 お正月のお参り



どなたさまもお気軽に

ぜひお参り下さい!

発 行

真宗仏光寺派 専念山 さい うん じ 西雲寺

住職 護城一寿

筆頭総代 末定育雄

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に!

お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集!

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。